

# 今、地球のためにできることー

## ノーベル平和賞を受賞したゴア元アメリカ副大統領に手紙を書こう

かけがえのない、わたしたちの地球。だれもがこの星を守りたいと願っています。

でも、地球は今、深刻な危機に瀕しています。その一つが地球温暖化です。

人類は温室効果ガスを劇的に増加させてしまい、気温は上昇を続けています。地球温暖化は、このまま進めばわたしたちの子どもや孫の世代には、さらに取り返しのつかない状況を引き起こす深刻な問題です。

2007年度ノーベル平和賞は、アル・ゴア元アメリカ副大統領と国連の「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)に授与されました。ゴアは、アカデミー賞2部門を受賞した地球温暖化に関するドキュメンタリー映画「不都合な真実」などで精力的な啓蒙活動を世界中で行ってこられたが、環境問題への取り組みが地球の将来の平和を守るという明確な姿勢と行動が高く評価されたのです。

今、地球を救うためにわたしたちはどのように考え、行動したらよいでしょう。

ゴアのノーベル平和賞受賞スピーチから、地球市民の若者の一人としてあなたはどのようなメッセージを受け取りますか。



極寒の北極海を何日も休まずに泳ぎ続け、ようやく見つけた浮氷に乗って溺死の難を逃れるホッキョクグマ。安定した氷原の消滅がこのような事態を招いている。(DAYS JAPAN 2007年10月号)

映画「北極のナヌー」© 2007COTN Productions, Inc. 4月23日DVD発売  
発売：株式会社コムストック・グループ  
販売：ジェネオン エンタテインメント株式会社

## 第9回(2008年度)津田塾大学高校生エッセー・コンテスト募集要項

### 1 手紙形式のエッセー募集

映画「不都合な真実」などで地球温暖化に対する世界的な啓蒙活動を行っているアル・ゴアに向けて、2007年度ノーベル平和賞受賞スピーチを読んであなたが感じたことや考えたことを、手紙という形式で自由に書いてみましょう。

### 2 応募資格

高校生(国籍・学年・性別は問いません。)

### 3 応募方法

英語の場合は、400 words(A4判用紙)程度、日本語の場合は、1,200字程度。

(A4判用紙、横書き、ワープロ・手書きいずれも可)

※別紙(A4判用紙)に、氏名(フリガナ)・性別・高校名(所在県名)・学年・郵便番号・住所・電話番号を記入して、表紙として原稿に添付し、郵送してください。

4 募集期間 2008年7月23日(水)~9月1日(月)(消印有効)

### 5 賞金等

最優秀賞1名(賞金5万円を贈呈。10月12日(日)津田塾大学において表彰します。)優秀賞若干名(賞金1万円を贈呈。)  
最優秀作品は津田塾大学広報紙 Tsuda Today と津田塾大学ホームページに、優秀作品は津田塾大学ホームページに掲載・公表します。応募作品は返却しません。応募作品の著作権はすべて津田塾大学に帰属します。

### 6 入選発表

10月12日(日)までに入賞者本人に通知します。  
(津田塾大学ホームページには10月12日以降掲載します。)

### 7 提出先・問い合わせ先

〒187-8577 東京都小平市津田町2-1-1  
津田塾大学「高校生エッセー・コンテスト係」  
Tel: 042-342-5113 E-mail: essaycon@tsuda.ac.jp

<http://www.tsuda.ac.jp>

津田塾大学ホームページで、第1回~8回の高校生エッセー・コンテスト選考結果等を掲載しています。どうぞご覧ください。

## “We have a purpose. We are many. For this purpose we will rise, and we will act.” Al Gore, “Nobel Lecture” (December 2007) より

2007年度のノーベル平和賞は、地球温暖化問題に警鐘を鳴らし、その対策に精力的に取り組んできたアル・ゴア元アメリカ副大統領と国連の「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)に贈られました。地球規模での気候変動が一刻の猶予も許されない緊急課題として私たちの目の前にある現在、「わたしたちには一つの大きな目的がある。わたしたちには多くの同志がいる。その力を結集して、今こそこの目的に向けて立ち上がり、行動を始めよう」と信念をもって国際社会に呼びかけるゴアの受賞スピーチは、まさに地球市民としての私たちの使命を力強く促すものでした。

We, the human species, are confronting a planetary emergency—a threat to the survival of our civilization that is gathering ominous and destructive potential even as we gather here. But there is hopeful news as well: we have the ability to solve this crisis and avoid the worst—though not all—of its consequences, if we act boldly and quickly.

So today, we dumped another 70 million tons of global-warming pollution into the thin shell of atmosphere surrounding our planet, as if it were an open sewer. And tomorrow, we will dump a slightly larger amount, with the cumulative concentrations now trapping more and more heat from the sun. As a result, the earth has a fever. And the fever is rising. The experts have told us it is not a passing affliction that will heal by itself. We asked for a second opinion. And a third. And a fourth. And the consistent conclusion, restated with increasing alarm, is that something basic is wrong.

温暖化がもたらす気候変動による自然災害が牙をむき、洪水や干ばつの被害、そして数限りない犠牲者の姿が世界の現実として報道されてきました。悲惨な結果をもたらした災害の原因は何だったのか、環境問題に真剣に取り組んできたゴアは、「根本的な誤り」があったのだと、私たち人類の過ちへの理解を促しているのです。私たちは文明という名のもとに消費社会を拡大し、膨大な量の二酸化炭素などの温室効果ガスを大気圏内に排出してきました。この加速こそすれ留まることを知らない「地球環境破壊」にすぐにでもブレーキをかけなければ、かつて「核の冬」が地球滅亡に直結する危機であったのと同様に、「炭素の夏」が地球を滅ぼす日が必ずや近い将来到来すると多くの科学者が指摘しているとゴアは述べています。



“The Namib Desert at Sunrise”

© Everett Kennedy Brown

Everett Kennedy Brown: フォト・ジャーナリスト。現在 epa (ヨーロッパ写真通信社) 日本支局長。一連の “Sacred Earth” からのこの作品について、「たった一本の木に、人間が向き合う地球の砂漠化の象徴をみる」と記している。

今、地球に何が起きているのか。

そして私たちに何ができるのか。

地球の未来、私たちの未来に新たな一步を標したアル・ゴアの力強いメッセージに、ぜひ、応えてください。地球市民である若者の一人として。

「人類が気づかないままに地球そのものに戦いを挑んでいた」ツケが、ついに制御できるギリギリの限界のところまで達しているという危機感を抱きながら、彼は1997年に、米国代表として気候変動枠組条約締約国会議（京都会議）に出席、先進国に温室効果ガス削減対策を遵守させる京都議定書の採択に尽力しました。国境を越えた地球の問題として具体的な行動を世界に呼びかけたのです。グローバルな視点からの具体的かつ妥協を許さぬ一貫した発言は世界の注目を浴び、地球温暖化に関する認識を大きく変えたといえるでしょう。地球全体が連帯し一丸となって行動を起こすことは、なによりも倫理の問題であると彼は力説しています。

We must abandon the conceit that individual, isolated, private actions are the answer. They can and do help. But they will not take us far enough without collective action. At the same time, we must ensure that in mobilizing globally, we do not invite the establishment of ideological conformity and a new lock-step "ism."

In the kanji characters used in both Chinese and Japanese, "crisis" is written with two symbols, the first meaning "danger," the second "opportunity." By facing and removing the danger of the climate crisis, we have the opportunity to gain the moral authority and vision to vastly increase our own capacity to solve other crises that have been too long ignored.

We must understand the connections between the climate crisis and the afflictions of poverty, hunger, HIV-Aids and other pandemics. As these problems are linked, so too must be their solutions. We must begin by making the common rescue of the global environment the central organizing principle of the world community.

受賞スピーチの最後で、ゴアはノルウェーの国民的劇作家、イブセンの言葉を引いて未来への責任を問います。現在の私たちの行動こそが未来を拓くというたしかかな信念を、私たちの意識に語りかけるのです。彼のノーベル平和賞受賞は、彼の言葉をさらに広く世界に伝え、地球にとって今何が必要かということの認識をもたらした、まさしく画期的な出来事となりました。このような意味では、たしかに彼は地球の未来に、新たな一步を標したのです。

The great Norwegian playwright, Henrik Ibsen, wrote, "One of these days, the younger generation will come knocking at my door." The future is knocking at our door right now. Make no mistake, the next generation will ask us one of two questions. Either they will ask; "What were you thinking; why didn't you act?" Or they will ask instead: "How did you find the moral courage to rise and successfully resolve a crisis that so many said was impossible to solve?"

We have everything we need to get started, save perhaps political will, but political will is a renewable resource. So let us renew it, and say together: "We have a purpose. We are many. For this purpose we will rise, and we will act."

Al Gore (1948 - )

元アメリカ副大統領。著書に、『地球の掟—文明と環境のバランスを求めて』(1992)、映画「不都合な真実」(2006)がある。

アル・ゴアは、1948年、アメリカに生まれました。ハーバード大学卒業後、ジャーナリストとして7年間勤めた後、1976年下院議員に当選、政治家に転身します。1984年、1990年に上院議員当選。1993年クリントン大統領のもと、第45代副大統領に就任、8年の任期のあいだ、積極的に環境問題に取り組みました。2000年には大統領選に出馬し、ジョージ・ブッシュ現アメリカ大統領と票を争ったことでも知られています。



〔朝日出版社「月刊 CNN English Express」提供〕

アル・ゴアが出演した映画「不都合な真実」(2006年パラマウント映画・監督デヴィス・グッゲンハイム)は、地球温暖化による環境破壊の「真実」を暴いて、危機意識を持つよう世界中に訴えかけました。

この映画は、サンダンス映画祭、カンヌ映画祭で上映され、2007年度アカデミー賞の「最優秀長編ドキュメンタリー賞」「最優秀歌曲賞」の2部門受賞を果たした話題作ですが、なぜ「不都合な真実」と名づけられているのでしょうか。ゴアは70年代からずっと地球温暖化問題についての活動をしてきました。1992年には『地球の掟—文明と環境のバランスを求めて』を出版。世界中を飛び回り、これまでに開いた講演会は千回を超えるといえます。しかし、彼が副大統領であるときでさえ、アメリカ政府はこの問題に真剣に取り組もうとはしませんでした。なぜなら、アメリカの経済や企業の利害にとって、環境破壊の「真実」はまさに「不都合」なものだったからです。いまでこそ話題になっているゴアの講演ですが、地球温暖化などは嘘だ、環境破壊などは問題ではないなどと批判もたくさん受けたといえます。2007年ノーベル平和賞受賞は、こうしたゴアの長い間の地道な活動がようやく評価され、日の目を見たということだといえます。

地球環境問題、地球温暖化対策…それがどんなに大切な問題かということとはよくわかったとしても、私たちは日々の生活に追われ、北極グマが陸地をさがせないでいることやハリケーンの被害にあった人々のことを常に考えつづけるのは難しいと感じてしまいます。けれども、アル・ゴアの主張は、そんな大それたことを考えなさいというわけではありません。映画「不都合な真実」のなかで、ゴアは、彼の息子が交通事故にあったことを語ります。息子を失うかもしれないと思ったとき、自分の人生でいちばん大切なものは家族なのだとあらためて気づかされたと言っています。この体験から、地球環境問題こそ最も重要な課題だと考えるようになったのだということです。

今慣れている暮らしを手放すことは難しいことです。けれどもすべてを失ってから気づいても手遅れになるということ、ゴアはやはり個人的な体験から語っています。ゴア家の農場はたばこを栽培していました。たばこは肺ガンの関係は早くから言われていましたが、今ほど深刻には受け止められていませんでした。彼の大好きだった姉は、10代からタバコを吸い始め、肺ガンで亡くなったのです。その後、ゴアの父はたばこの栽培をやめたといいますが、なぜもっと早く行動しなかったのだらうと悔いる気持ちはずっとかかえていたはず。いま始めなければならぬということの意味をこのエピソードは教えてくれています。

地球を守ろうということは、だからそんなに難しく考えることはないのです。

私たちが大好きな人、大好きな街、大好きなもの、それらを大切に思うこと。そこからすべてがはじまるのです。だからこそ、地球温暖化に対して行動を起こすことは、倫理の問題だと彼はいうのでしょうか。

参考書籍：

アル・ゴア『地球の掟—文明と環境のバランスを求めて』小杉隆訳、ダイヤモンド社、1992年  
アル・ゴア『不都合な真実』枝廣淳子訳、ランダムハウス講談社、2006年  
映画「不都合な真実」DVD パラマウント・ホーム・エンタテインメント・ジャパン、2007年